長崎大学大学院教育学研究科
教職実践専攻

平成28年度

教育研究成果報告書

平成29年3月

はじめに

教職大学院の実践研究について想う

長崎大学の教職大学院は、平成20年４月に、新しい時代の学校教育に必要な専門性と実践的指導力を有する教員の養成を目指し、それまで修士課程(学校教育専攻、教科教育専攻)のみであった研究科を、専門職学位課程(いわゆる教職大学院)と修士課程(教科実践専攻)の２課程に改組して発足した。爾来平成29年３月で９年目を終え、新年度４月から10年目を迎えることになる。

教職大学院設置から今日に至るまで、理論と実践を架橋する教育を目指しながら、学部卒学生の高度な教育実践力と指導力の養成、並びにマネジメント能力を備えた現場の中核的教員の養成に努めてきた。設立以来変わることなく、その養成の中心にあるものは、「実践研究」の重視である。

実践研究は、自らの教育実践を日ごろから繰り返し省察することにより、地域や学校、そして子どもの実態や授業づくりに即して、絶えず教育的実践の内容や方法を検討する行いである。そうした実践研究を行う価値とは、何であろうか。それまで気づかなかった新しい知見を獲得できる、授業に有用なアイディアを得ることができるなど、多々考えられよう。それらのうち、特に重要と思われるものは、教育実践力に必要な課題解決力を培えることである。教育実践力の向上には、幅広い人間性や深い教養の育成が不可欠であることは言うまでもないが、そのほかに、実地を試みるに必要な実践的な授業力や展開力、並びに対象となる学習者を理解し学びに誘う子ども理解力、そして学級や教科あるいは学校等を組織的に運営する経営力も必要であろう。これらの日常的な実践場面で求められる各能力の向上とともに、教育実践に関わって次々と現れてくる新たな課題に対応するための能力として、課題解決力が必要となる。この課題解決力の向上には、問題の解決の方向を見通すことのできる高度の解釈力・診断力や、設定した課題を解決するための方策を見い出す企画力が求められる。こうした課題解決力の獲得のためには、実践研究の積み重ねを通じて身に付く実践研究力の向上が役に立つ。この実践研究を行う場を整え、高度専門職職業人としての教員を養成するために、教職大学院が構想され設置されたと言ってよい。

本誌は、初めて刊行された平成27年度に引き続き、長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)の教育と研究を総括し、情報発信を兼ねて作成・配布することとした。本専攻における教育実践力の高度化のために、諸賢の忌憚のないご意見を賜れば幸甚である。

平成29年３月20日

長崎大学大学院教育学研究科
研究科長　藤　木　　卓

目　次

はじめに

学校教育実践実習の概要と報告 …… 1

大学院生による学校教育実践実習の報告

実　習　1 …… 2

実　習　2 …… 4

実　習　3 …… 6

実　習　4 …… 7

実　習　5 …… 7

教育実践と省察のコミュニティ 2016 …… 8

「新しい時代の教育実践をめざして」

クロスセッション 2016 ……13

教育実践研究成果の発表概要 ……18

学校教育実践実習の概要と報告

学校教育実践実習のねらい

学校教育に関する基礎的・理論的な理解の上に、学校の教育活動全般を主体的に経験し、省察すること。また、学級経営、授業実践、生徒指導、教育相談等にかかわる課題や問題に関し、指導教員の指導の下で自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。

構成

- 学校教育実践実習１　（学級経営、生徒指導）
- 学校教育実践実習２　（学級経営、授業実践）
- 学校教育実践実習３　（生徒指導、教育相談）
- 学校教育実践実習４　（各コース実践研究）
- 学校教育実践実習５　（各コース実践研究）

学校教育実践実習の内容

教職大学院における教育実習は、大学院生が学校の教育活動全般を経験できるように、「学校教育実践実習１～３」において、便宜上、実習ごとに中心的な内容（学級経営・生徒指導、学級経営・授業実践、生徒指導・教育相談）が定められており、大学院生は、これらの実習を含む全ての実習（「学校教育実践実習１～５」）において、主体的にテーマを設定し、実習の計画を作成し、積極的に取り組むことが求められている。

学校教育実践実習１（学級経営・生徒指導）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、児童・生徒理解に基づく生徒指導等に必要な資質や能力の向上を目指す。

実習内容

学級経営補助や基本的生活習慣づくりの補助など、学級担任教師の活動の観察や補助活動を通して、学級経営の意義と実際について理解を深め、実践できるようにする。また、各教室の掲示物、児童・生徒の座席配置、安全への配慮などを、観察や担任教師からの聞き取り等を通して理解し、実践できるようにする。

また、児童・生徒の行動観察や指導補助を通して、一人一人の児童・生徒の個性や集団としての特徴などについて、さらに児童・生徒が学校生活、学級生活に満足感を持ち、楽しい学校生活を作っていくための条件などについて理解を深め、集団づくりやソーシャルスキルを育てるための手だてを修得する。

大学院生による学校教育実践実習１の報告

永冨　英臣（学級経営・授業実践開発コース）

実践実習１では、５月から６月の期間で一週間に一度、附属小学校５・６年Ａ組で観察実習を行った。複式学級ということもあり、児童らの中にも今までやってきた学級の仕組みがあり、教師の中にも取り組ませたいことがある。それをどのようにして折り合いをつけていくかという部分で、学級経営の難しさを感じた。担任の先生は、極力児童の今までのやり方を尊重したいとおっしゃっていた。しかし、児童の好き放題にさせるということではなく、許されないことは許さないという姿勢は崩さないようにしておられた。

わたし自身、児童が自分で動かしていく学級経営を目指していた。そのため今回の実習で「児童に任せること」「教師が引っ張っていくこと」「許さないこと」の区別を明確にしたうえで、児童と教師の間で合意をしていく必要があることが分かった。

砂田　真子（学級経営・授業実践開発コース）

実習１では、研究内容に基づいたテーマを設定し、ねらいを明確にして実習をスタートした。まず、授業中や休み時間に児童と積極的にかかわり、児童一人一人や学級の様子を把握した。また、担任教師の指導を観察したり、その中で見取った手立ての意図を考えて

質問をしたりした。そこから学んだことは、学習面では、子どもにわかりやすい言葉で、ポイントを絞って段階的に指示をすると、児童に伝わりやすいということや、それによって授業が児童の思考を中心に進むということである。教師は、「児童にーをさせる」のではなく、「児童が主体的にーできるようにする」という意識で環境をつくり、指導・支援を行う必要があることも学んだ。また、生活面では、児童が中心となって生活班での役割分担や係活動、遊びを行っている様子を見て、児童の主体性を尊重しながら学級をつくっていくことが大切だと感じた。このようなことを学び、実習２につながる実習となった。

山越　翔陽（学級経営・授業実践開発コース）

実習１で、私は長崎大学附属小学校５年生に配属された。そこで、「学級経営」「生徒指導」の視点のもと実習を行った。初日は、必死に学級の子どもたちの名前を覚えてしまった。次の日から学級経営で大事にされていることを記録した。子どもたちは、自然な反応を大事にしており、常に子どもたちの発言、先生の話に自分なりの言葉を発していた。反応があることは、発信者に安心感がうまれ、聞き手には、聞く意識が生まれると思った。授業を観察して、感じたことは、個への対応をしっかり行っていること。一人一人の考えに目を通す時間を作ること、発表する人が毎回同じにならないよう工夫すること、である。理解できない子への手立てを考える手がかりも得ることができた。一人一人に応じた対応は難しいと思うが、とても大切なことなので、児童理解が教育のスタートにあるということを感じることができた。今後の実習でも児童理解をどのように行っていくか考えていきたい。

学校教育実践実習２（学級経営・授業実践）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、指導計画や学習指導案の作成、授業実践等を通して、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに授業力の一層の向上を目指す。

実習内容

学級経営の計画、学校の組織運営（校務分掌）の在り方について演習を通して理解するとともに、学級づくりのためのソーシャルスキル訓練の実習、討論を通しての話し方・聴き方の育て方等の能力の向上を図る。さらに、学級通信の作成補助などを通して家庭と連携する力量を高める。また、事例研究などを通してＰ（計画）―Ｄ（実施）―Ｃ（評価）―Ａ（改善）のマネジメントサイクルによる実践ができるようにする。

また、教育課程編成の在り方や運営、具体的取組について実践的に学び、年間（単元）指導計画や学習指導案の作成、学習材の開発、及び授業参観や授業補助、授業実践等の活動を通して、教師の日常の活動を学び、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに、授業力を一層向上させる。

大学院生による学校教育実践実習２の報告

猪子　夏菜子（学級経営・授業実践開発コース　現職教員大学院生）

実習２では、「多様な考えを認め合い、共に考える道徳授業の実現を目指して」という実習テーマのもと、主に６年生に関わり、道徳の授業実践を行った。ねらいとする価値は、「役割・責任」であり、子どもの思考を促すために、子ども一人一人の発言をつなげていくことを課題として取り組んだ。話し方・聞き方のポイントを事前に確認し、資料分析をもとに中心発問を子どもにとって考えやすいものにした。実施後は、発話分析や指導教員とのリフレクションを行い、子ども一人一人の道徳的価値を発展させる授業づくりについて検討することができた。実習校では、道徳の校内研修への参加や、先生方の授業観察などをさせていただき、それも学びとなった。貴重な学びの時間を与えていただいていることに感謝し、今後も研究を深めていきたい。

山科　理穂（子ども理解・特別支援教育実践コース）

「特別な支援を要する子どもが在籍する通常学級における指導・支援について–学習につまずきのある児童生徒に着目して–」というテーマのもと、教育実践実習を行った。教育実践実習１での観察、インタビューから、補足的な指導と配慮が必要だと思われる子どもに着目し、授業に参加できるための教師の指導・支援方法を観察した。これをもとに、教育実践実習２では、その個別の支援と全体の支援の充実の広がりに着目し、クラスワイドの指導・支援について考察を行った。そして、全ての子どもへの効果的な授業を基本とした上で、補足的な指導と配慮が必要だと思われる子どもへの指導・支援の方法を考え、単元計画や、学習教材の開発を教師から学び、算数科と国語科の授業実践を行った。個別の指導では、意図的な繰り返しや机間指導の配慮等、クラスワイドの指導・支援としては、板書の構造化や、教材の視覚化、簡潔でわかりやすい発問、活動の工夫等に配慮をし、授業実践を行った。

田中　僚樹（学級経営・授業実践開発コース）

実践実習２は、９月に10日間、附属小学校で行った。実習テーマを「学習形態を工夫した授業実践とその考察」と設定し、実習１に引き続いて、授業の観察と社会科の授業実践を行った。授業観察では、担任がどのような場面でどのような意図をもって学習形態を工夫しているかを観察した。授業実践では、「スーパーマーケット」と「長崎の食文化」の２つの授業を実践し、対話を通して子どもたちが主体的に学び、自分の考えを深めることができるように、観察したことを生かして様々な学習形態を取り入れた授業を実践した。また、これまで現場に出たことがなく、学ぶことができなかった学級経営においても、連続して実習を行うことで、担任が日ごろから行っている取組や学級目標、掲示物などの工夫を学ぶことができた。今後の実習でも、引き続き社会科の授業で子どもたちが対話を通して主体的に学び、自分の考えを深めることができるよう授業を実践していきたい。

学校教育実践実習３（生徒指導・教育相談）

目標

児童・生徒理解に基づく生徒指導、教育相談、特別支援教育、キャリア教育等に必要な資質や能力の向上を目指す。また、一人一人の児童生徒のニーズに合った指導・支援についての理解と適切な指導能力を培うことを目指す。

実習内容

児童生徒の持っている力を引き出すために、生徒指導の３機能である「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」「自己決定の場を与える」を適切に位置づけた学級経営や教科指導を計画し実践する。

また、教育相談的視点を生かした集団づくり・授業づくりを計画・実践し、教育上の配慮を必要とする児童生徒への合理的配慮の在り方についても理解し、実践する。

いじめ、不登校等の要因となる指導上の課題を見出し、改善のための具体的方策を考え取り組むなどの実践ができるようにする。

大学院生による学校教育実践実習３の報告

野口　将信（学級経営・授業実践開発コース　現職教員大学院生）

実習３では、２年生の授業補助と５年生の外国語活動の授業実践が中心であった。２年生の授業補助を行う中で、担任の先生の個に応じた指導を目にすることが多くあった。１学期は、支援の必要な児童が多い実態を踏まえて、学級の決まり作りやしつけを中心とした指導が大半を占めていたが、２学期になると、一人一人の個性を認めながら、褒めながら伸ばしていく指導へと変化していく様子が見られ、学級経営の手法として学ぶことが多かった。外国語活動の授業実践では、５年生の１単元（４時間）を任され、３時間目には校内研修の研究授業として、たくさんの先生方に参観していただいた。授業反省会では、本時の授業内容だけでなく、研究内容（英語絵本の活用）についてのご意見もいただき、研究を進める上での参考になった。実習４でも校内の研究授業が予定されている。実りある授業実践になるよう準備を進めていきたい。

米田　悦子（子ども理解・特別支援教育実践コース　現職教員大学院生）

現職２年プログラムの学校教育実践実習は、実践実習１から年間を通して、公立の同一校における実習となる。したがって、実践実習２における、児童の実態に応じた学習指導計画の授業実践を、本実習において継続して行うことができたため、自身の研究の焦点化や深化を図りながら進めることができた。

私の研究の柱は「通級指導教室の連携」である。連携の２つの視点は、①「他校との通級指導教室間での連携（システム論的）」と、②「校内における通級指導教室と所属学級との連携（個の実態に応じた支援）」である。今年度は、主に②の視点で取り組んだ。通級指導教室における個に応じた自立活動を中心にした支援の研究はもちろん、通級指導教室で学んでいる児童の所属学級での支援もできた。双方の立場を、同時並行して実践することは、現場では難しい状況であるため、個の教育的ニーズをより明確にすることができた。

笹田　茜（学級経営・授業実践開発コース）

私は、長崎市内の公立学校で実習３を行わせていただいた。「児童同士の繋がりを育むために」というテーマのもと、児童同士のコミュニケーションの取り方を観察した。その中で、児童同士の関係に大きな課題はないものの、自尊感情が低いと感じることが多く、次学年への接続を考え、ソーシャルスキルトレーニングを用いて、自分の短所を友達に長所としてリフレーミングするという授業を行った。この授業を行うことで、子どもたちが自分のよさに気付いた。また、友達から長所として捉えなおしてもらうということで、自分で気づくより、強くよさを実感することができたようであった。また、実習テーマから離れ、普段の授業を多数実践させていただくことができた。授業経験がほとんどない私にとって、毎週授業をさせていただけたことで、教師という職の日常をより現実的に経験し、配当学級以外の先生方の指導を頂けたことは大変貴重な体験となった。

学校教育実践実習４・５（各コース実践研究）

目標

学校教育にかかわる実践研究課題について、自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。また、自ら実施した実践研究に基づいて「実践研究報告書」（最終レポート）を作成すること。

実習内容

受講生は、自らの実践研究課題を設定し、実践研究を中心とする実習を主体的に行うことが求められる。そのため、実践研究課題や研究計画等を記した実習計画書を作成し、計画に沿って積極的に実習を行い、実習終了段階では検証計画に基づき自らの実習を評価し、「実践研究報告書」（最終レポート）を作成する。

学校教育実践実習４、同５の報告は、研究成果の発表概要として、後述の「教育実践研究成果発表」の項に、掲載されている。

教育実践と省察のコミュニティ 2016

「新しい時代の教育実践をめざして」

「教育実践と省察のコミュニティ」は、平成26年度より、「教育実践研究フォーラムin長崎大学」と連結して２日間にわたり開催されている。今年度は「新しい時代の教育実践をめざして」というテーマを掲げ開催された。初日(11月５日(土))の「教育実践と省察のコミュニティ」では、大学院生によるポスター発表、およびその発表に関する討論・総括が行われた。そのほかに、教員によるポスター発表、文部科学省の石田有記氏による学習指導要領改訂の動向に関する講演、福井大学教育学部附属中学校の牧田秀昭氏による授業づくりの変革に関する講演も行われた。２日目(11月６日(日))開催の「実践研究　長崎ラウンドテーブル」と合わせて、今日の教育課題に関する知見を深め、実践と研究を往還する有意義な機会となった。以下は、大学院生および教員によるポスター発表や講演に関する大学院生のコメント等を「ニュースレター No.14」より抜粋、掲載したものである。

（１）ポスター発表について

子ども理解・特別支援教育実践コース　平野　晶子

教職大学院ならではの実践的な研究内容を拝見することができ、非常に良い時間を過ごすことが出来た。１ケースの児童や生徒の発達等を追って研究しているものから、教科毎や学級全体の研究を行っているものまで、多岐にわたり、院生や現職の先生方が実践研究を行っていることが分かった。ポスターセッションに参加して、様々な専攻の方々の研究内容に触れることを経験した今、改めて、教職大学院生としての学びの在り方を考える良い機会になったと感じている。新たに発見できた今後の課題や自身の専攻等を踏まえ、実践研究に活かしていきたいと考える。

子ども理解・特別支援教育実践コース　田添　智美

ポスターセッションは、現在自分が取り組んでいる実践研究を他者の実践研究と結びつけながら多角的に考えることができる点が魅力であると実感した。また、教育に携わる立場や環境、経験がそれぞれ異なる発表者が実践研究の成果を開き合うからこそ、互いに新しい考え方への驚きと発見があるとともに、多様な視点から課題の解決に向けての手立てや考えを深めることができる。さらに、発表者と参加者の距離が近いため活発に意見を交換することができ、とても有意義な場であった。本日の学びを生かしながら、今後の実践研究に取り組んでいきたい。

学級経営・授業実践開発コース　木下　卓哉

初めてポスター発表に参加させていただいたが、自分にとって学びのある時間となった。オープンスペースで参加者が自由に見て回れるシステムだったので、今まで勉強する機会のなかった他の校種や教科、研究の中で自分が「知りたい」」と思ったことについて、いろいろと学ぶことが出来た。また、内容以外でも、実践研究を行う上での視点の持ち方や先行研究の使い方、まとめ方等、「研究の進め方」という視点からの学びも多くあった。自分の研究の参考になり、視野を広げる良い機会にもなると感じたので、次回のポスター発表にも参加したいと思った。

学級経営・授業実践開発コース　溝手　浩太郎

ポスター発表は、附属校の先生方や院生の先輩の実践研究についての報告を聞き、今後の研究活動について議論することができたため、とても有意義な時間であったと思われる。発表者との距離が近く、質問や討論を行いやすい環境であるため、個々人が目指している実践研究について、発表者と観察者が一緒に吟味できるという点がポスター発表の良さではないだろうか。来年、私は発表者としてポスターセッションの場に立つことになる。多くの参加者とともに考え、深めることができる話題を提供できるように、これからも実践と省察を繰り返していきたい。

教科授業実践コース　山口　裕貴

今後の自分の研究において、今回のポスター発表はとても参考になった。まず、自分の興味があるもの、気になるものを中心に先輩方や先生方の研究がどんなものかを知ることができた。その中から研究方法や調査の仕方、わかりやすいポスターのまとめ方など、新しい発見がたくさんあった。ポスター発表を通して、自分の研究の課題や不足している点、改善点なども見え、とても有意義な時間であった。自分の校種や教科だけでなく、様々な校種や教科を通してみることで、意外な発見や学びがあった。今後も自ら視野を広げて研究に生かしてつなげていきたい。

教科授業実践コース　小洞　琢己

11月４日に行われたポスターセッションでは、普段見る機会の少ない教育学研究科に所属する方々の研究を見ることができ、また気軽に質問ができるため、密度の濃い交流もできた。ポスターセッションは、発表者には発表し質問を受けることで、これからの研究の深化を図ることができる。参加者には、自分と違う校種・教科の研究に触れることで新たな視点を獲得し、これからの研究の参考にするということについて非常に有効である。私の実践研究は2年後に行う予定である。それにそなえて来年のポスターセッションにも参加したいと思う。

（2）学習指導要領改訂の動向に関する講演について

子ども理解・特別支援教育実践コース　金原　亮介

学習指導要領改訂の動向について、文部科学省初等中等教育局教育課程課の石田有記氏よりお話をいただいた。そのなかで特に印象に残っているのは、「社会に開かれた教育課程」を実現するということである。これは、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むというものである。この目標を達成するためには、大人も子どもと一緒に成長しようという意識が重要になると感じた。これから求められる能力を今の大人が獲得しているとは思えないからである。

子ども理解・特別支援教育実践コース　安原　知邑

平成30年度より新たな学習指導要領での教育が開始される。今後、教員として現場に出る私にとって、学習指導要領の理解は必要不可欠である。今回の学習指導要領の改訂により、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現すること、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けることができる子どもを育てることが求められていると分かった。興味や関心を持ち、思わず考えたくなるような授業を展開していけるよう、学んでいきたいと思った。

学級経営・授業実践開発コース　加藤　めぐみ(現職教員大学院生)

これまで学習指導要領改訂の動向について、教育課程部会から出される論点整理を中心に、自分なりに解釈し理解しようと努めてきたが、一つ一つの言葉を、自分の中で構造的に理解するのが難しいと考えていた。今回基調講演を聴けたことで、新しい学習指導要領が目指すものやその背景について、頭が整理されていくのを感じた。特に印象に残ったのは、「『なぜ』を追究する過程を通じて、生きて働く知識として習得される」という文言で、これまで社会科の授業実践を中心に大事にしてきたことを、今後も進めていくよう後押しされているような気持ちになった。

学級経営・授業実践開発コース　寺園　康秀

今回の講演で特に気になる内容は２つあった。１つは「深い学び」と「見方・考え方」を育てるために効果的だと考えられる、ＡＬ(アクティブ・ラーニング)の導入についてである。ＡＬを通して他者と概念や考え方を共有することは、新しい自分の発見や多様な視点・考え方を育むきっかけのひとつになると思った。２つ目は、カリキュラム・マネジメントについてである。個々の教科毎での学びは、本来教科間で学びの繋がりが有って然るべきである。今後生徒の深い学びを促していくうえでも、教科横断的な教育内容の見直しが求められていると改めて実感できた。

教科授業実践コース　岩﨑　紗知

今回の「学習指導要領改訂の動向について」の講演を拝聴し、今後の教育の在り方について深く考えることができた。その中でも、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」と示されている「育成すべき資質・能力の三つの柱」に関しては、相互に関連しており、そのつながりを意識して高めていかなければならないということを改めて感じた。従来の知識や技能の習得に加え、子どもの学びのプロセスを大切にし、変化の激しい社会の中で生きて働く知識として子どもたちに身につけさせるための授業を目指していきたい。

教科授業実践コース　上野　広恵

次期学習指導要領の改訂に向けて、育成すべき資質・能力の三つの柱が示されていたが、社会に関わる人間性の育成や、社会に活かせる知識・技能を得ること、そしてその知識・技能をどのように使うかということが現行のものと比べて、より重視されているように感じた。私は中学校音楽科教員を目指しているが、音楽の授業の中では音楽表現の創意工夫のための技能を身に付けることや、音楽を愛好する心情を育む等の目標があるが、社会にどのように活かすか不明確なことが多い。社会に活かせる音楽の授業を目指して、授業づくりを行っていきたいと感じた。

（3）授業づくりの変革に関する講演について

子ども理解・特別支援教育実践コース　　山下　実咲

「授業で、二度と同じことは起こらない。」この言葉が印象的であった。「教える専門家」ではなく「学びの専門家」として、教師はどうあるべきなのか。安易にはできない「授業改善」の力を磨いていくことの大切さについて考えさせられる講演だった。アクティブ・ラーニングについては、教員に「どんな発言にも価値を見出す」という覚悟と技があることで、それが「対話的で深い学び」の実現につながるということを学んだ。そして、まずは教員自身が、主体的・対話的で協働的な学びのコミュニティを築いていくことが大切だと感じた。

子ども理解・特別支援教育実践コース　池山　莉央

本講演において、「学びの専門家」へのプロセスを学んだ。その中で、「まずは教師が学習内容に徹底的にほれ込むこと」という言葉が印象に残った。その上で授業のねらいとその意図をしっかりと持って臨むことが、子ども達の表情や動きを引き出すことにつながると感じた。目の前の刻一刻と変化していく子ども達に対し、授業は再生不可能であるという意識を持ち、「説明できる授業」を行っていきたい。今後、実践実習の場を生かし、教師としての力量形成に努めたい。

学級経営・授業実践開発コース　入江　亮生

牧田先生の講話では、授業づくりの視点や授業観についてのお話をいただいた。その中で、自分は授業を行う際、自身の都合で授業を作り、実施していることに気づいた。学びは子どもにとってはすべてが新鮮なものであるにも関わらず、教師の都合で「これは大切」「これは重要でない」と軽重をつけ、子どもの意見をないがしろにする場面が今まで多くあった。しかし、それは教師の都合である。子どもの興味のベクトルを大切にし、子どもを中心に据えて授業を行う。その中で何が大切なのかを子どもが学ぶ。それが授業として大切であると感じた。

学級経営・授業実践開発コース　生嶌　夏希

今回、授業力向上についての講演を拝聴し、一つの授業を創り出すことの奥深さを改めて実感した。本講演を通して、子どもたちの学びの質を高め、理解の深まりを重視した授業を目指していきたいと感じた。そのために、「なぜこの授業を行うのか」という授業の位置づけや「今の目の前の子どもにとってどんな意味があるのか」という授業の価値づけといった視点を大切にしながら授業実践を行っていきたい。また、自身の授業やその振り返りを通して、子どもの学びのプロセスを知り、それに応じた指導法を日々考えていく中で子どもの成長を実現させていきたい。

教科授業実践コース　佐古　まりあ

私はこの講演を通して、授業づくりとは何かを改めて考えさせられることとなった。経験が浅い私が抱く授業づくりのイメージは、教材研究を重ねて指導案をきっちりと作り、その通りに行うことが大切、というものが強かった。それももちろん大切だが、子どもの反応によって学びが期待できる場合は路線変更をし、指導案を考える時点で子どもが自分たちで学びを深めていく余裕のある活動を設定することも効果があるということを、実践例をもとに学ぶことができた。子どもの学びのために自らも授業について学び続け、授業力を磨き続ける教員となりたい。

教科授業実践コース　川畠　美穂

「主体的・対話的で深い学びの授業」とはどのようなものなのか。授業をつくり、実際に子どもに授業を行うとき、本当にそれは子どもの学びにつながっているのだろうか。この講話を聴いて、授業づくりの認識を改めなければいけないと感じた。「主体的・対話的」な要素を授業に盛り込んでいるつもりでも、ただそれを形式的に行えばよいわけでもない。重視すべきなのは、暗記のような表面的な浅いものではなく、実りのある深い学びである。子どもから柔軟な思考を引き出し、対話からなる深い学びの機会を与えることが「授業」であるのだと感じた。

クロスセッション 2016

「クロスセッション」は、大学院学生が主体的に年間４ー６回程度を目途に、時間割外に開催している自主セミナーであり、平成21年度から実施されている。発表担当の学生が文献研究や実習の要点をプレゼンテーションした後に、その内容に関して、他の学生や教員が一緒になって質疑応答を行う。教員は、その学生が今後検討すべき課題、その考察手順、方法等を助言するとともに、プレゼンテーションのスライドや配付資料についても改善点を指摘、助言して、大学院学生の実践力向上を支援している。こうした学び合いの機会をとらえて、学部卒大学院生、現職教員大学院生が共修、協働し、研究者教員、実務家教員も一緒に参加して議論することにより、討論（理論）と実習（実践）の有機的な往還が可能となるよう努めている。

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第1回　12月　クロスセッション～

日時:12月13日（火）　16:30～18:00
場所:31番教室

●M3　瀬戸崎千亜紀（せとざき　ちあき）
『小学校段階における規範意識をはぐくむための実践』

●M2　松本歩（まつもと　あゆみ）
『児童の自立と協働を促す教員の支援の在り方
ー通学合宿と学校教育を結びつける視点からー』

●M1　安樂百香里（あんらく　ゆかり）
『通常学級担任の学級の「気になる児童」の「よさ」を生かす受容的支援についての考察』

●M2　黒木美帆（くろき　みほ）
『特別支援学校における自閉症スペクトラム障害のある児童の指導について』

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第2回　12月　クロスセッション～

日時:12月20日（火）　16:30～18:00
場所:31番教室

●M2　青山友里（あおやま　ゆり）
『知的障害学生における援助要請行動の向上に向けた検討』

●M2　寺川愛美（てらかわ　まなみ）
『発語の少ない自閉スペクトラム症児へのコミュニケーション指導・支援』

●M2　野﨑徹（のさき　とおる）
『すべての児童が居心地の良い学級となるための教師による支援段階に応じた効果的な支援の在り方についての検討』

●M2　泉セシリア（いずみ　せしりあ）
『対人面で困難を示す児童に対する通級指導教室での個別指導の効果ーアセスメント及び自立活動の「個別の指導計画」の活用を通してー』

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第3回　2月　クロスセッション～

日時:2月2日(木)　10:30～12:00
場所:第2PC室

●M2　山口　栞奈(やまぐち　かんな)
『中学生における
英単語の綴り習得困難への支援方法の検討』

●M1　池山　莉央(いけやま　りお)
『重症心身障害の子どもの
概日リズムの評価と指導に関する実践研究』

●M1　山科　理穂(やましな　りほ)
『特別な支援を要する子どもが在籍する
通常学級における指導・支援について』

●M1　米田　悦子(よねだ　えつこ)
『通常学級に在籍している特別な配慮の必要な子どもへの
支援の在り方と効果について～通級指導教室の連携～』

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第4回　2月　クロスセッション～

日時:2月8日(水)　10:30～12:00
場所:32番教室

●M2　金原　亮介(かねはら　りょうすけ)
『中学・高等学校における
効果的なキャリア教育に関する実践的研究』

●M2　山本　実来(やまもと　みく)
『自尊感情の低下を防ぐための学級経営
～しなやかな子どもを育てる～』

●M1　田添　智美(たぞえ　ともみ)
『ユニバーサルデザインの視点を活かした授業作り
ー学級全員の参加・理解の促進を目指してー』

●M1　安原　知邑(やすはら　ちさと)
『すべての子どもが居心地がよいと感じる学級づくり
ー教師の支援の在り方についてー』

●M1　山下　実咲(やました　みさき)
『知的障害児の理解と支援
～自己理解に着目して～』

長崎大学大学院教育学研究科　学級経営・授業実践開発コース
H28年度　第1回　クロスセッションのご案内

日時：4月15日（金）16時10分～17時40分
場所：教育学部41番教室　　形式：プレゼンテーション

クロスセッションとは、普段のゼミの垣根を越え、研究や自分の実践について深め合う場です。
大学の先生方や現職の先生、院生、学部生などを交え、様々な視点で深める事ができます。

大学院でどのような研究が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。
参加したい、興味があるという方は右のアドレスにご連絡ください。

話題提供者

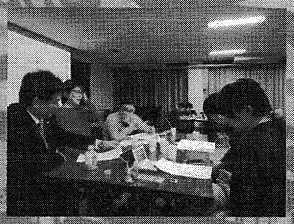
M2　松永　光曜
「自己学習力を育む小学校体育科における授業づくり」
キーワード
動画比較法、ICT、小学校体育科、学習意欲

M2　鈴木　計哉
「授業態度記録システムの開発と情報の可視化による有用性の検討」
キーワード
授業態度記録、システム開発、情報の可視化、授業観察、タブレット端末

学級経営・授業実践開発コース
M1　笹本　健太
E-mail：kenken2198@gmail.com

長崎大学大学院教育学研究科　学級経営・授業実践開発コース
H28年度　第2回　クロスセッションのご案内

日時：**6月17日（金）16時10分～17時40分**
場所：**教育学部41番教室**　　形式：ラウンドテーブル
テーマ：実習と中間発表のふり返りについて



ラウンドテーブルとは、少人数のグループで
ざっくばらんに議論を行うものです。
グループは、大学の先生方や現職の先生、院生
学部生などを交え、構成します。

話題提供者

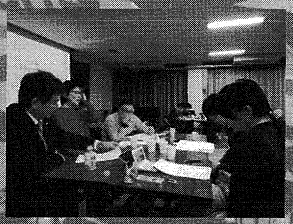
- M2　笹本　健太　校種：中学校（理科）
- M2　松永　光曜　校種：小学校
- M2　林田　清美　校種：小学校
- M2　山本　麟太郎　校種：小学校
- M2　益田　航平　校種：小学校
- M2　行成　功志　校種：中学校（数学）

大学院でどのような研究が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。
参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース　M2　笹本　健太
E-mail：kenken2198@gmail.com

長崎大学大学院教育学研究科　学級経営・授業実践開発コース
H28年度　第3回　クロスセッションのご案内

日時：7月29日（金）16時10分～17時40分
場所：教育学部41番教室　　形式：ラウンドテーブル
テーマ：実習について



ラウンドテーブルとは、少人数のグループで
ざっくばらんに議論を行うものです。
グループは、大学の先生方や現職の先生、院生
学部生などを交え、構成します。

話題提供者

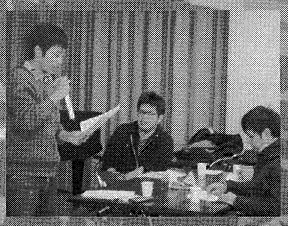
- M1　小船　高志（現職）　校種：小学校
- M1　加藤　めぐみ（現職）　校種：小学校
- M1　笹田　茜　校種：小学校
- M1　生嶌　夏希　校種：小学校
- M1　永冨　英臣　校種：小学校

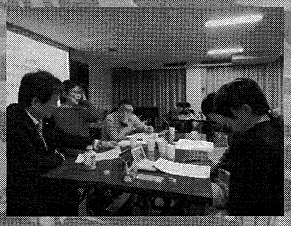
大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。
参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コースM2　笹本　健太
E-mail：kenken2198@gmail.com

長崎大学大学院教育学研究科　学級経営　授業実践開発コース
H28年度　第4回　クロスセッションのご案内

日時：10月28日（金）16時10分～17時40分
場所：教育学部43番教室　　形式：ラウンドテーブル
テーマ：実習について





ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。
グループは、大学の先生方や現職の先生、院生学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。
参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コースM2　笹本　健太
E-mail: kenken2198@gmail.com

話題提供者

M1　猪子 夏菜子（現職）
校種：小学校

M1　砂田　真子
校種：小学校

M1　入江　亮生
校種：中学校

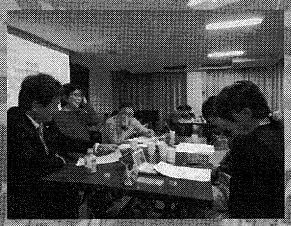
M1　山越　翔陽
校種：小学校

M1　溝手　浩太郎
校種：小学校

M1　野口　将信（現職）
校種：小学校

長崎大学大学院教育学研究科　学級経営・授業実践開発コース
H28年度　第5回　クロスセッションのご案内

日時：11月25日（金）18：00～19：30
場所：教育学部41番教室　形式：ラウンドテーブル
テーマ：研究について



ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。
グループは、大学の先生方や現職の先生、院生学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。
参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース　M1　砂田真子
E-mail：sunada-mako@arion.ocn.ne.jp

話題提供者

M2　田上　左千代（現職）
校種：中学校（国語）
「生徒の自尊感情を育む教師の手立てに関する実践研究」
キーワード
自尊感情、有用感、学級活動

M2　川﨑　健太（現職）
校種：高校（数学）
「学習のつまずきを生徒が自らの学習活動に生かす態度を育成する指導法の研究」
キーワード
学習のつまずき、高校数学、アクティブラーニング

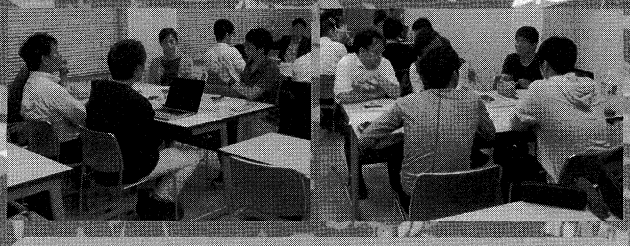
M2　鈴木　計哉
校種：高校（数学）
「授業における即時記録システムの開発」
キーワード
協働学習、学習評価、システム設計

M2　林田　清美
校種：小学校
「聞き合う活動を取り入れた道徳授業づくり」
キーワード
聞き合い、道徳

M2　山本　麟太郎
校種：小学校
「ICTを活用した校外学習の授業デザイン―主体的な学びを促す教材の開発と実践―」
キーワード　校外学習、ICT教材開発、主体的な学び

長崎大学大学院教育学研究科　学級経営・授業実践開発コース
H28年度　第6回　クロスセッションのご案内

日時：12月16日（金）16：10～17：40
場所：教育学部43番教室　形式：ラウンドテーブル
テーマ：研究について



ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。
グループは、大学の先生方や現職の先生、院生学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。
参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M1 砂田真子
E-mail：sunada-mako@arion.ocn.ne.jp

話題提供者

M2 行成 功志
校種：中学校（数学）
「学習意欲に焦点を当てた教師の手立てに関する研究」
キーワード
学習意欲、授業デザイン、主体的な学び

M2 笹本 健太
校種：中学校（理科）
「生徒の発表を支援するひな形レイアウトを用いた中学校理科授業の実践の検討」
キーワード
ひな形レイアウト、伝え合い、足場かけ

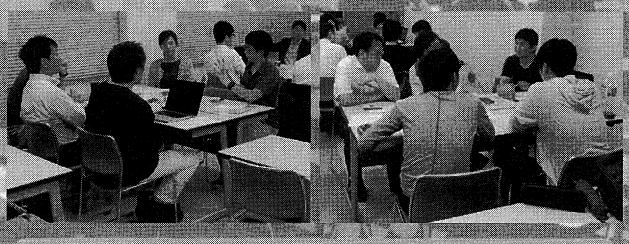
M2 蘇 娜
校種：小学校
「小学校における国際理解教育に関する実践研究」
キーワード
総合的な学習の時間、異文化理解、体験

M2 益田 航平
校種：小学校
「『身近に感じる平和教育』を目指した授業実践」
キーワード
社会科

M2 松永 光曜　校種：小学校
「児童の課題発見・解決活動を促す動画比較法を活用した授業実践」
キーワード
小学校体育、映像を比較することで課題を見つける、自分の課題を見つけて解決する

長崎大学大学院教育学研究科　学級経営・授業実践開発コース
H28年度　第７回　クロスセッションのご案内

日時：１月２０日（金）１７：００～１８：１０
場所：教育学部２２番教室　形式：ラウンドテーブル
テーマ：実習・研究について



ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。
グループは、大学の先生方や現職の先生、院生学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。
参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M1 砂田真子
E-mail：sunada-mako@arion.ocn.ne.jp

話題提供者

M１ 野口将信（現職）
校種：小学校

M１ 笹田　茜
校種：小学校

M１ 生嶌　夏希
校種：小学校

M１ 寺園　康秀
校種：中学校(理科)

M１ 永冨　英臣
校種：小学校

教育実践研究成果の発表概要

教育実践研究成果発表会は、今年度(平成28年度)より、修了予定者が30名を超えるため、2日間で開催することとなった。本発表会は、理論と実践を架橋する教育を目指すなかで、大学院学生が修めた多様な教育研究の成果を地域や学校現場に還元することを旨としている。また、長崎県教育委員会、各市町教育委員会、長崎県教育センターより助言を頂いたり、県内の全ての小・中学校、高等学校にも広く周知することにより、地域の学校の教員、修了生の参加も得て、大学院学生の学修を多面的に深化・省察することも企図している。以下、今年度の発表者とその発表概要を記す。

(1)発表者及び発表概要

第1日(平成29年2月17日(金))発表者(発表順)

1　黒木　美帆　　「特別支援学校における自閉症スペクトラム障害のある児童のコミュニケーション表出指導について−妥当性のある指導を行うためのプロセスに着目して−」

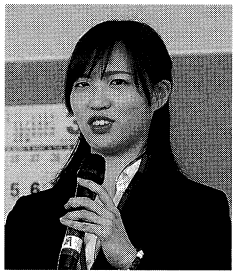
本研究では、特別支援学校における知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害のある児童２名を対象に、学校の日常文脈において指導機会を設定する機会利用型指導法によりコミュニケーション表出指導を行った。指導を行うにあたり、①生態学的アセスメントによる情報および、教員と保護者のニーズを収集し、その情報を踏まえて指導目標・指導機会および指導方法を決定すること、②指導目標・指導機会・指導計画について担任らと協議をして決定すること、③指導の経過について、データに基づいて協議する機会を定期的に持つこと、の指導プロセスを行った。その結果、それぞれの児童のコミュニケーション表出においてポジティブな行動変容がみられ、その行動変容は２か月後のＦＵ期でも維持された。また、指導目標を設定する際に用いたニーズとスケジュールのアンケートの効果、担任らと指導内容等について定期的に協議を行うことの効果も示された。

2　寺川　愛美　　「発語の少ない自閉スペクトラム症児へのコミュニケーション指導・支援」

特別支援学校小学部に在籍する発語の少ない自閉スペクトラム症児１名を対象とし、個別指導を行った。本人が日常で使うことができて周囲が許容できる範囲の発語を10語程度獲得し、コミュニケーションの拡大を可能にすることを目指し、指導プログラムを立案、実施した。実践としては、①課題Ⅰ：構音器官の運動、②課題Ⅱ：音声模倣の課題、③課題Ⅲ：1語文表出の課題、④課題Ⅳ：コミュニケーションに役立つ発語を促進する課題の独自の課題プログラムを作成、実施した。また、日常場面に関して、担任に聞き取りを行った。課題Ⅰ、課題Ⅱは、数段階の評価レベルを作成、評価した。課題Ⅲは、表出回数・明瞭度・自発性を測定し、獲得言語の種類等を導き出した。課題Ⅳに関しては、日常場面を観察し、生起数等を測定した。個別指導の結果、目標であった10語に近い７語を獲得した。日常場面の

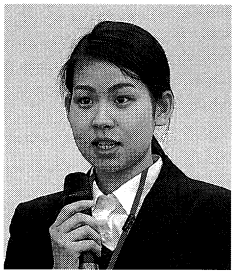
観察や担任の聞き取りにより、コミュニケーションの拡大も可能となった。

3　青山　友里　「知的障害がある生徒を対象とした援助要請行動の向上に関する考察」



本実践研究は、知的障害がある複数の生徒を対象として、援助要請スキル向上のために援助要請行動の促進を目的とした。実践研究１では、援助要請行動の質的・量的向上を目的とした介入・コミュニケーションスキルの評価を実施した。その結果上昇した評価項目はあったものの、評価項目の精選や評価基準の充実に課題がみられた。これを受けて、実践研究２では対象者の観察を元に評価項目を精選、さらには評価を行う項目を対象者に沿った内容を用いて検討した。２回の実践研究により、援助要請行動を抑制する可能性があると考えられる要因や、援助要請行動の表出に有効と考えられる介入が明らかとなった。一方で、客観性を保持した評価の難しさや、複数の教師が連携し共通した指導・支援を行うことの難しさがあった。特別支援教育における指導・支援は、生徒のQOLに直接的な影響を及ぼす可能性が高いことから、今後も課題解決に継続して取り組んでいきたいと考える。

4　泉 セシリア　「学習面･行動面で困難を示す児童への支援の在り方に関する実践研究」



特別支援教育は、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行うものであり、的確な実態把握や個別の指導計画を作成して指導を充実させることが大切である。文部科学省(2012)の調査によれば、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒のうち85.6%が個別の指導計画の作成がなされていないとされている。そこで本実践研究では、通級による指導を行う上での個別の指導計画の重要性に注目し、対人面に困難を示す児童への個別指導の在り方を検討した。実践内容は､①児童の実態を把握､②自立活動における個別の指導計画の作成､③児童の実態に合った指導内容の構想､④授業実践であった。その結果、授業後の児童の観察で、授業前にあった友人に対する暴言・暴力が減り、通常学級での授業への取り組み方に変化が見られた。また、通級指導教室で個別指導を行うことの有効性を見つけることができた。

5　瀬戸﨑 千亜紀　「小学校段階における規範意識を育むための実践」

本実践研究では、規範の「なぜ？」を問う「それってなぜタイム」と２回の実践授業を通して、外から与えられ守るだけの他律的な規範意識ではなく、自らの判断で行動できる自律的な規範意識の内面化を図ることをねらいとした。「それってなぜタイム」では、児童が規範を守る理由を考え、セリフとして表現する過程でこれまであたりまえに守ってきた規範に対し疑問を抱き、改めて規範のよさや大切さを認識することができた。２回の授業実践では、規範を守る理由や誰のために守るのかをクラス全体で意見を共有することができた。実践の事前と事後で行った質問紙調査では、事後の得点が事前

の得点より高い結果となり、児童の規範意識に影響があったことが示唆された。今後は、自律的な規範意識の内面化にとどまらず、内面化された規範意識に基づいた行動が取れるための実践や、児童の行動を客観的に評価できる評価方法の検討が課題である。

6　松本　　歩　「児童の自立と協働を促す教員の在り方-通学合宿と学校教育を結びつける視点から-」

本実践研究では、すべての児童の自立・協働の力を育むために、社会教育の一環である通学合宿を学校教育において実践するというのが目的である。まず、自立については、家庭において自立チャレンジノートに取り組んだ。通学合宿のプログラム要素となっている「自分で時間を決めて行動する」などの６つのチャレンジ目標の中から選択し、具体目標をたて実践を行い、保護者の方のサインをもらい振り返りを行うという流れで実施した。次に、協働については、学校においてSSTに取り組んだ。毎週朝の時間15分を用いて、学級の状況を見ながら計10回の実践を行った。結果として、数値として期待する効果は得られなかったが、学校教育においても保護者の方の協力なしでは、すべての子どもに自立・協働の力を育むことが難しいこと、学級基盤が整っていない学級へのSSTによる介入は難しく、SSTは学級状況を知るための手段として有効であることが示唆された。

7　野﨑　　徹　「小学校高学年に対するユニバーサルデザインの指導法・支援法の検討-すべての児童にとって居心地の良い学級を目指して-」

本実践研究では「ユニバーサルデザインの授業づくり」と「Q-Uを活用した学級経営のアセスメント」を軸に実践研究を進め、児童が安心して意欲的に活動できる仕組みづくりを検討したいと考えた。方法として①児童及び学級担任に対する意識調査、②児童の実態把握からの方針決定、③授業でのユニバーサルデザインの指導法の実践を行った。実践では、児童への意識調査をもとに、視覚化を工夫した授業(授業のユニバーサルデザイン化)、ルールのある空間で皆が快適に生活するための環境を作る(教室環境のユニバーサルデザイン化)、児童の心にアプローチしてクラスの雰囲気を柔らかくし学び合うための環境や関係づくりをする(人的環境のユニバーサルデザイン化)を行った。実施の際のアンケートでは、分かりやすかったという児童が8割を超えた。さらに、学級生活満足群の児童が68%から85%へと上昇し、学校生活に関する意欲も有意に高まるという結果が得られた。

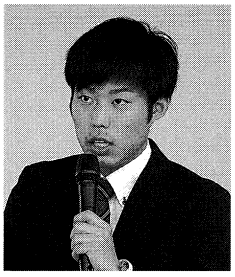
8　全　　サラ　「小１プロブレムに対応する音楽授業のデザイン」

本実践研究では、小１プロブレムに対応するセルフ・コントロールを身に付ける活動を伴う音楽の授業を目指す。それは即ち、児童が学校生活の様々な規則に対応することに気付くきっかけとなる音楽授業のことである。その具体的な手立てとして音楽科の内容である【共通事項】ア：音楽を特徴づけている要素「リズム」の「身体運動」を取り入れた授業実践を行い、その活動の有効性を明らかにすることを目的としている。授業実践研究内容は、本授業実践の導入段階に、音の高低を表す身体運動を５分程度で取り入れ、毎回の授業の中で徐々に難易度をあげて繰り返し楽しめる活動をした。研究結果は、授業実践で【共通事項】を基とした「身体運動」を行い、授業への態度に良い変化が現れ、有効性が見られた。また、アンケート結果では、授業実践の前後を比べ、対象児童の音楽への意欲向上にもつながったことがわかった。今後の課題として、検証対象が少なかったことが挙げられる。今回の実践研究での結果や課題を基に、今後も継続して研究を進めていきたいと考える。

9　林田　清美　「「聞く」活動に焦点を当てた道徳授業–児童が多面的・多角的に考える道徳授業を実現するために–」

本実践研究では、児童が友達のもつ考えを「聞く」ことで、多面的・多角的に考えることができる道徳授業を目指し、構想・実践を行ってきた。また、授業中の児童の姿やワークシートの記述から、実践した道徳授業を、「聞く」活動に焦点を当てながら考察し、改善策を見出してきた。授業実践から、「聞く」活動を実践する以前に、授業者が資料の読み聞かせや活動前の明確な指示などを上手くできていないことが見えてきた。そこで、それらの反省点をいかして、資料の読み方を工夫したり、ワークシートの使い方を明確に説明したりするなどの改善を図った。一方で、児童が「主人公の行動をどう思うか？」という資料に基づいた問いについて、考えを聞き合うことはできたものの、実生活に置き換えたりすることができず、道徳授業として足りないところもあった。そのため、今後の実践では「聞いてみてどうだったのか」を深く検討させられるような道徳授業を追究したい。

10　益田　航平　「平和を身近に感じることを目指した社会科における授業実践」



本実践研究では、児童が「平和を身近に感じる」ことの必要性を、平和教育の課題をもとに論じ、その可能性を社会科教育に見てきた。そして、実際に単元構想及び授業実践を行い、児童の振り返りの記述をもとに、「平和を身近に感じる」ことのできる授業であったか考察した。初めに平和教育と社会科教育の関連性を、平和教育の分類、学習指導要領の記述、社会科の特性の３点から考察した。そこから史実をもとにしながら、戦争についてじっくりと認識を深めさせることが、平和教育における社会科の役割であることを整理した。次

に、戦争についてじっくりと向き合うことを意識した単元の実践を行った。例えば、戦時下の小学生が兵士に憧れている様子の日記を読んで、児童は、当時の小学生の戦争に対する認識と自分たちの戦争に対する認識の違いを感じていた。よって、戦争の実相について多面的に学び続ける社会科授業は平和教育の推進に有効に働くことが示唆された。

11　松永　光曜　「児童の課題発見・解決活動を促す動画比較を活用した授業実践」

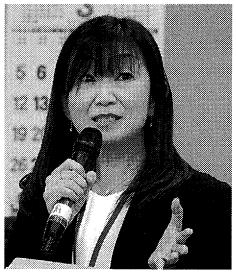
本実践研究では、児童の「課題発見と課題解決の過程」に焦点を当て、小学校体育科(マット運動)において、児童の主体的な学びを支援するための教材・教具の活用に関する試みを行い、今後の指導の在り方に関する課題を明らかにする研究を行った。教材・教具の活用に関する試みとして、児童の課題発見を促すために「手本の動き」と「比較したい動き」の2種類の映像を比較する「動画比較」を行い、その有効性を検証した。また、今後の指導の在り方に関する課題については、「授業映像」や「学習カードの記述内容」、「運動有能感測定調査の結果」、「動画比較が課題発見の役に立ったのか調べるアンケート調査の結果」を基に分析・考察を行った。その結果、課題発見を促すために動画比較を用いることについて、活動に参加した約９割の児童が肯定的に感じていた。また、本実践を通して、運動有能感が低いとされる集団では、運動有能感の向上がみられた。そして、指導の在り方についても今後の課題を明らかにすることができた。

12　蘇　　娜　「小学校における国際理解教育に関する実践研究−日本と中国の異文化理解とコミュニケーションを深める総合的な学習の時間を通して−」

本実践研究では、小学校の総合的な学習の時間の授業をもとに研究を行った。異なる文化をもつ人々に対する理解を深めるため、「外国人とのコミュニケーションの機会の設定」と「異文化への興味・関心を高める活動の設定」という二つの面を工夫した。そのようにして、児童が異文化への興味・関心を高めることと異なる文化をもつ人々を理解し、お互いに尊重し合い、相手の立場に立って考える態度や心情を育てることを目的とした。アンケート調査、振り返りシート、授業のビデオ分析によると、留学生と交流する活動や中国の少数民族の衣装を着る体験活動を通して、多くの児童が積極的なコミュニケーションを図ろうとする様子が見られた。また、異文化を身近に感じたり、興味・関心を持ったりする様子も見られ、異文化理解を深めることができた可能性があると示唆された。

13　安樂 百香里
（現職教員大学院生）

「通常学級担任による「気になる児童」の肯定的・受容的支援の実践研究　−互いの「よさ」や「個性」を認め合う学級づくりにつなぐ−」



本実践研究では、通常学級における「気になる児童」の支援を、「よさ」や異なる「個性」を互いに認め合う他児との関わりの中で行うことにより、自尊感情を高め、安心感や満足感を得ることのできる学級づくりと、そこでの教師の肯定的・受容的支援について実践、考察を行った。また「気になる児童」の「よさ」に目を向けた肯定的支援や「気になるところ」も見方を変えて捉える受容的支援について考えるために通常学級担任への調査を実施した。本実践研究により「気になる児童」だけでなく、全ての児童の頑張りや良い行いに対して肯定的言葉かけをすること、そして一人一人の「個性」を受容的に受け止めることが、児童に“自分は「認められている」「これでよい」”と感じる安心感や満足感を与え、また、担任にとっても児童を肯定的に受け止めることに繋がることが分かった。その中で「気になる児童」も他児も、共に成長していく共生の学級づくりができるよう、今後も研鑽を重ねていきたい。

14　小船　高志
（現職教員大学院生）

「自尊感情に関する実践研究と教師としての成長」

本実践研究では、児童の「友達に関心がうすい」などの「友達との関わり」における問題、「思いや考えが出せない」などの「自信のなさ」の実態を受けて、それらの課題解決に向けて自尊感情を育むための実践を行った。実践は、授業実践と日常的な実践を関連させ、プログラムとして設計し、「まんてんえがお大作戦」と名付けた。「まんてんえがお大作戦」では、特に基本的自尊感情と呼ばれる領域を育むことをねらいとし、それを育む上で重要な「共有体験」を実践のキーワードとしている。共有体験については、主に授業、日常的な実践において、「頑張りやよさ」の視点で様々な体験・感情の共有ができるように工夫した。実践を通して、「友達に関心をもち、友達の頑張り・よさを進んで見つける子ども」、「自分のよさに気づき、さらにそのよさを伸ばそうとする子ども」の姿を見取ることができ、このプログラムが、自尊感情を育む上で有効であることが認められた。

15　山口　亮介
（現職教員大学院生）

「小学校音楽科における「対話的な学び」の有効性と課題」

本研究は、小学校音楽科における「対話的な学び」の有効性と課題について、３つの問いを生成し、検証・考察を行った実践研究である。問１「これから求められる『対話的な学び』は何なのか」について、文部科学省「論点整理」、「芸術ワーキンググループによる取りまとめ」などを基に、本研究における「対話的な学び」を整理した。問２「教師にはどのような授業デザインが求められ、どのような力を身に付けることが求められるのか」について、知識構成型ジグソー法に焦点を当て、鑑賞の活動において、検証・考察を行った。問３「教師と児童、及び児童間の対話を促進するために、具体的にどのような言葉が用いられることが良いのか」について、わざ言語の活用し、歌

唱や器楽の活動において、検証・考察を行った。問２、問３の検証を基に、問１について全体的な考察を行うことで、小学校音楽における「対話的な学び」の有効性と課題を明らかにすることができた。

16　橋口 秩月子
（現職教員大学院生）

「高等学校国語科における評論の学習指導の研究–的確な理解につなげるためのアプローチ–」

本実践研究は、高等学校の評論の学習指導が抱える様々な課題を踏まえ、評論の学習指導において「的確な理解」につなげるためにはどのようなアプローチが有効かについて研究したものである。「論理の構成や展開に沿って文章の流れをたどる」「段落・文章の要旨をとらえた後に、部分の詳細な理解に戻る」という２つを授業作りの視点とし、それを達成するために４つの手立て（「接続語句シート」「キーワード」「中心文」「中心発問」）を取り入れた計５時間の授業を実際に行って、考察を加えた。さらに「的確な理解」に到達する段階を設定し、高校２年生「現代文Ｂ」の学習指導計画を作成した。最後にこれらの実践・構想を振り返り、「評論に対する興味関心」「４つの手立て」「〈的確な理解〉における批判的思考・評価」「評論で〈何ができるようになるか〉」という点から、成果と課題に言及している。

第2日（平成29年2月18日（土））発表者（発表順）

17　田上 左千代
（現職教員大学院生）

「生徒の自尊感情を育む教師の手立てに関する実践研究」

本実践研究では、生徒の自尊感情を「学校で」育むために考えられる教師の手立てを、生徒の感じる「自己有用感」に着目して、開発的生徒指導の側面から行うこととした。学級経営における「自治的な係活動の推進」を通してのアプローチは、尺度の結果と照らし合わせることで、その効果がある程度確認できた。また、「書き言葉」による「思いの可視化」が生徒相互、また生徒・教師間の「認め合いのツール」として有効であることがわかった。授業実践における「協働的な学習活動」では、生徒が達成感や成就感を得、自信を付けていく様子を観察できた。また、これまでの道徳実践に「筆記開示」の理論を組み合わせることによって、より意図的で効果的な実践開発への示唆を得た。さらに、学校現場に無理なく取り入れられる尺度を活用して、生徒の情報を共有することが、一人の生徒に多くの大人が関わる教科担任制の中学校では、生徒理解に効果的であることが確認できた。

18　川﨑　健太
（現職教員大学院生）

「学習のつまずきを生徒が自らの学習活動に生かす態度を育成する指導法の研究」

本研究は、生徒が抱える学習のつまずきを生徒自身の学習活動の改善に生かすことができるのではないかと考え、生徒のつまずきに着目した。先行研究や観察を踏まえた考察から学習のつまずきを「生徒が問題解決に必要な知識・技能に既存の知識でアクセスできないときの生じるもの」と定義した。生徒につまずきを認識させ、学習活動に生かす態度を育成するために、①学習のつまずきをまとめるグループノートの作成、②学習のつまずきに着目した試験対策プリントつくり、の２つの取組を実践した。①はつまずきに対する生徒の認識を促進すること、②はつまずきを学習活動に生かす態度を育成することをねらいとした。取組の結果、生徒は学習のつまずきをより認識できるようになった。また、つまずきを表出することへの抵抗感が和らぎ、自らの学びを他者に素直に表現できる生徒が多くなった。しかし、つまずきを学習活動に生かす態度の育成については課題が残った。

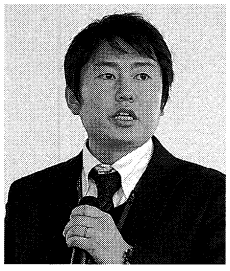
19　平間 ゆかり
（現職教員大学院生）

「体育授業における生徒の協働的な学びに関する実践研究−生徒同士のかかわりを中心として−」

保健体育の今日的課題として、運動する子供としない子供の二極化や仲間とうまくかかわることができないなど、豊かなスポーツライフを実現する資質や能力が低下していると指摘されている。そこで、本研究では、生徒同士のかかわりの充実を手段として位置付け、望ましい人間関係を構築するとともに、すべての生徒が楽しさを真に実感できる体育授業の実現を目的とした。具体的には、「場の設定」、「学習カードの工夫」、「役割分担」について実践し、検証を行った。その結果、ほとんどの生徒において、技能が向上した喜びや達成感を味わい、体育授業の楽しさを実感できた。さらに、アンケート調査から、仲間とかかわることの大切さや楽しさを実感することができた生徒が多いことがわかった。このようなことから、体育授業において、生徒同士のかかわりを充実させることは、望ましい人間関係の構築や楽しさを目指す手段として、一定の有効性を認めることができた。

20　小八重 智史
（現職教員大学院生）

「中学校技術科における思考力・判断力・表現力を育む授業の検討」



平成20年改訂学習指導要領以降、思考力・判断力・表現力の育成が重視され、技術・家庭科（技術分野）では、「技術を評価・活用する能力」の育成を目指し、様々な先行研究がおこなわれている。しかし、平成29年改訂に向けた中教審答申では、能力の育成に対し課題が指摘されている。そこで、本研究では「技術を評価・活用する能力」に関わる「技術ガバナンス能力」を主権者として身につけさせておくべき能力、「技術イノベーション能力」を技術立国として育みたい能力と捉え、「技術ガバナンス能力」の確実な育成のための学びのユニ

バーサルデザイン・ガイドラインを取り入れた授業の開発及び実践、「技術イノベーション能力」の育成のための、製作を前提としない課題解決型設計・計画学習の開発及び実践を目的とした。その結果、学びのユニバーサルデザイン・ガイドラインを取り入れた授業の有用性を示すこと、及び、開発した学習プロセスで「技術イノベーション能力」を育むことができる可能性を示すことができた。

21　槇　　謙太　　「解釈・意思決定による判断力育成を目指した社会科授業」

本実践研究では、中学校社会科において、知識を活用して判断する能力を育成することを目指して実践した。その手立てとして、毎時間の授業において、学習内容を知識として習得することに加えて、その習得した知識を活用して選択・判断を行う問いを実践することとした。また、社会科における判断力を、「社会的事象に関する複数の解釈の中から選択・判断する」ことと「社会問題に対して複数の主張の中から選択・判断し意思決定する」ことに分類し、それぞれの違いを明らかにしながら、実践研究を行った。この実践研究を行うことで、知識の習得場面での指導力の向上や、判断力についての認識の深まりといった成果が挙げられた。また、生徒もこの実践研究を通して、次第に学習した知識を選択・判断の根拠として述べるようになっていったことから成果が見られた。評価基準・規準の確立など課題も残ったものの、有意義な成果の得られた実践研究であった。

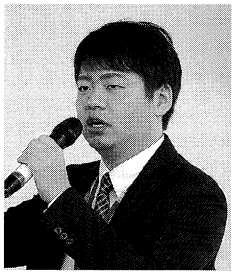
22　山本 麟太郎　　「校外学習における主体的な学びを促す授業デザインに関する研究」

大学院での学びの中で、私は教師としての力量を向上させることができたと感じている。例えば、伝達する方法のみを「授業」とする考えから、学びあいを促すことも「授業」であるという考えへと授業観が変わった。これは、「校外学習における主体的な学びを促す授業デザイン」についての研究を通して「主体的」について理解を深めたからであろう。本実践研究の目的は、校外学習の実態を調査し、課題を抽出することで、タブレット端末を効果的に用いる場面を検討した。さらに、実践的評価によって、単元構成とタブレット端末活用の有用性を検討することであった。方法として、スーパーマーケットにおける校外学習について、課題を抽出できたこと、その課題を解決するための授業デザインをしたことができたことである。成果として、児童の発見した工夫が多様化したり、体験活動と事後学習の結びつきが強くなったり、体験活動中に主体的な姿がみとれたりすることができた。

23　中田　智大　「高等学校物理における生徒の主体的な学びを目指す指導」

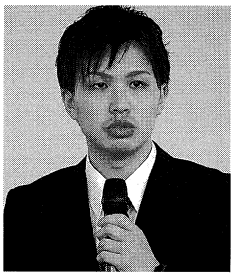
本実践研究では、物理の授業を通して生徒の主体的な学びを実現させていくことを目標とした。その手だてとして、生徒が自らの問題として捉え、他者とのかかわりの中で解決していくような問いを設定し、生徒の主体的な学びの実現を目指した。その結果、こうした授業を通して、生徒からは考えなどが深まったというような意見が得られた一方で、生徒の主体的な学びが実現されたかについての客観的な評価はできなかったため、その効果を科学的に証明することはできなかった。また、授業アンケートの分析から、生徒は授業で学んだことについての理解や用語などの暗記に重点を置いた意見が多く得られた。依然として、学習の結果を重視しているものと考えられた。しかしながら、生徒からは学習の途中途中で、明るい表情や楽しそうに学ぶ姿が見られた。このような生徒の姿を大切にしながら、今後も生徒の主体的な学びを実現するために実践を続けていきたい。

24　行成　功志　「学習意欲に焦点を当てた授業デザインと実践−授業観と学習観の変容を通して−」



２年間の大学院での学びを振り返ると、私自身の学習観と授業観に視野の広がりが見られた。生徒が自ら試行錯誤を繰り返し成長する姿を見ていく中で、「めざす教師像」は「学級のリーダー的存在」だけでなく、「影から支える黒衣的存在」であるとも考えるようになった。また、授業において生徒が主体的に学ぶ姿を見ていく中で、「めざす授業」は細かく丁寧に教え込む「わからせる授業」だけでなく、生徒主体の「わかる授業」も重要であると考えるようになった。よって生徒が主体となるためには学習意欲が重要と考えた。そこで実践研究では、学習意欲を高めるための授業デザインと検証を目的とした。授業デザインには現場の教師の手立てを参考とした。授業実践記録を基に、デザインした手立ての有効性や授業の様子を振り返ることで、生徒の意欲的に学ぶ姿を見取ることができた。また、学習意欲を高める手立てはその場に応じて様々であるのは明らかである。今後は、学習意欲を高める授業デザインを追求していくとともに、教師としての指導力を高めていきたい。

25　深水　晴紀　「高等学校芸術科美術における評価の工夫−ポートフォリオを用いた制作過程を中心に−」



美術における指導と評価は、完成した作品の出来栄えを中心とする技術面が判断基準となりがちで、「表現」に至る過程が軽視されているのではないかと考えた。本研究は、高等学校芸術科美術におけるポートフォリオを用いた授業方法及び制作過程の評価方法を提案し、その有効性を明らかにすることを目的とした。研究の結果、ポートフォリオを活用することにより、生徒の「関心・意欲・態度」や「発想や構想の能力」が可視化され、制作過程における試行錯誤、こだわり、見通

し等を評価することができることがわかった。ポートフォリオを含まない評価と含む評価の比較から、「関心・意欲・態度」や「発想や構想の能力」を積極的に評価することで評価結果に違いが出ることがわかった。また、生徒アンケートからは、ポートフォリオの活用が制作意欲の向上に繋がっていることが窺えた。さらに、研究の過程おいて、ポートフォリオ作成の効率化についても検討している。

26　鈴木　計哉　「授業観察による生徒の様相を見取る力量形成の過程−即時評価システムの開発および実践的な活用を通して−」

本実践研究では、座席表を用いて授業を観察し、生徒の様相を即時的に記録するシステムを開発することを目的とした。また、システムの開発を通して、教員がどのような観点で生徒の様相を見取っているかについて学ぶこととした。１年次の実習では、授業中における生徒の様相として、授業態度を観察した。その際、実習を通して得た視点から、記録する項目を決定した。活用実践およびインタビュー調査の結果、教員がどのような視点で授業中における生徒の様相を見取っているのかを学ぶことができた。特に、授業中の様相を学級経営や生活指導等に役立てるための視点は、今後教員になったときに役立てることができると考える。しかし、１年次の実習の課題として、授業態度のような表面的な見取りのみに筆者の視点が向いていたことが挙げられた。そこで２年次の実習では、学習評価を通して生徒の様相を記録するシステムを開発した。その際、協働学習にも視点を向け、全天球動画を使った事後評価ができるように設計した。

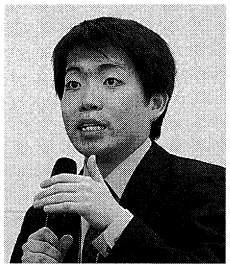
27　森　　竜也　「高校数学における生徒が計画を立てる力を育む指導法の研究」

数学において学習者が未知の問題に対して試行錯誤するためには、解き方のパターンを押さえる以上に、解決へ至るアイディアを推測する「計画を立てる」ことが必要である。本研究では、計画を立てる力を育む指導法として、1. 生徒にとって未知の問題を扱うこと、2. 「似た問題はないか」、「使える公式はないか」といった思考だけでは解けない体験を積ませること、3. 自身の立てる計画を意識させること、の３点を取り入れて授業実践を行った。この授業とワークシートに対するインタビューを行ったところ、生徒の計画を立てる力の向上が示唆される結果が得られた一方で、1を必ずしもすべての生徒に満たすことが出来ず、1を満たせなかった生徒に対する有効な手立てに課題が残った。今後は年間を通しての計画を立てる力を育む授業デザインについても考察していきたいと考える。

28　中村　一史　「生徒が「見通しをもつ」理科授業の実践研究」

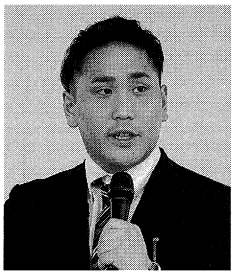
本研究は、生徒が単位時間あたりや単元を通しての「見通しをもつ」授業を展開することで、生徒自らが観察、実験の方法を立案する力を高めることを目的とした。その手立てとして、教師自身が単元を通しての授業展開の工夫や、授業の導入での生徒への課題の投げかけの工夫を行った上で、授業実践を行った。また、ワークシートにも生徒が内容を整理しやすくなるような工夫を施した。その結果、教師が意図をもった授業計画や指導の工夫をすることで、生徒は「見通しをもつ」ことができるということが示唆された。さらに、アンケートの分析結果から、見通しをもつことができた生徒は、課題に対して疑問をもち、それを自ら進んで探究しようとする態度、自分の考えを他人に伝えようとする態度、学習の結果を自らノート等にまとめようとする態度が高くなる傾向があることも示唆された。

29　杉　　恒平　「読譜力育成のための高等学校音楽科授業」



本研究の目的は、「読譜力」、中でも楽譜を見て、聴取することなく旋律のリズム・音高を把握する「読譜力」に焦点を当て、実践を行い、その成果を検証することであった。実習校での授業を観察し分析するとともに、実態把握を行い、読譜に関しての実証授業を実践した。成果としては、生徒は聴覚的・視覚的に音楽の授業を取り組むことで、様々な視点から音楽と向き合うことができ、場面に応じて必要な能力を判断したりして、表現活動に取り組むことができるようになる。このような活動で全ての生徒がある一定基準をクリアすることができ、より良い音楽活動を行うことができるようになる。このような学習指導を心がけることによって、音楽科の目標が達成されると考える。しかし課題として、その実現は容易でないことが今回の実践研究によって明らかにされた。今後は、音楽教師として４月より勤務校にて、継続的且つ児童・生徒の発達段階に応じた授業設計を行い、聴覚的・視覚的に音楽を1つの学問として取扱い、実践を行っていきたいと考える。

30　本村　洸樹　「コミュニケーション活動につながる英語の文法指導−中学校で習得する現在及び過去進行相、動名詞、分詞形容詞の用法に関して−」



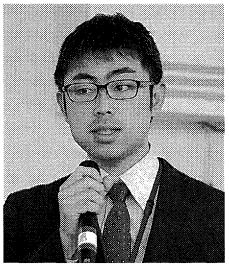
本実践研究の目的は、生徒が、教師による文法指導に基づいて、英語を用いたコミュニケーション活動を円滑に行うことができるよう授業を構成することである。具体的には、現在及び過去進行相、動名詞、分詞形容詞用法に関する文法指導が、コミュニケーション活動においてどのように活かされるのかを考察した。授業実践では、関係代名詞から分詞の形容詞的用法へと単元間のつながりを持たせた指導を行った。結果として、生徒たちが後置修飾特有の語順に意識を向けるようになるなど、本実践研究を通して、体系的な文法指導の在り方の一例を示すことができた。また、文法の導入からコミュニケーション活動実施までを円滑に行うためには、文法事項をどの

ように文脈の中で用いるのかを理解させる機会を設けることが必要であると考え、発展的な文法指導として、文脈に沿うように関係代名詞と分詞の形容詞用法を挿入するという会話文の課題の設定を行った。

31　笹本　健太　「中学校理科において伝え合う学びの実現を目指した授業デザインと実践研究」

近年の子どもたちに対して、表現力や伝達力などの資質・能力が求められている。このことから、相手にわかりやすく情報を伝えるための資質・能力(以下、伝える力)が必要であると考える。本実践研究の最終目的は、子どもたちの伝える力の向上のため、自分の持っている情報を生徒同士がわかりやすく伝え合う学び(以下、伝え合う学び)を継続して実現することである。そのため、伝え合う学びの初期段階に焦点を当てた授業を、デザイン研究の手法を用いて検討した。そこで、ジグソー法を参考にした伝え合う学びをデザインし実践した結果、伝え合う学びの機会を確保し、生徒が自信を持つことに繋がった。しかし、伝えられる側の理解において課題が残った。この結果を踏まえ、発表のレイアウトを統一した伝え合う学びをデザインし実践した結果、伝えられる側の理解を促すことができた。また、伝える側と伝えられる側の双方が感じる発表への負荷を軽減できた。

32　山本　　賢　「五感を重視した直接体験型理科授業の実践」



本実践研究は、中学校理科に対する興味・関心、および学習意欲の向上を目指した。事前調査において、中学生の理科に対する意識と、理科授業における直接体験、幼少時の自然・生活体験がそれぞれ相関関係にあることがわかった。このことをもとに、中学校理科の授業に五感、特に皮膚感覚、嗅覚に重点を置いた直接体験を意図的に取り入れ、その効果について考察した。授業前後でアンケートを行い、理科に対するポジティブな意識、ネガティブな意識、有用感の３つの項目の点数を比較した。その結果、ポジティブな意識と理科に対する有用感の項目で有意な上昇が見られた(paired t-test, $p<0.01$)。また、授業実践後に理科に対する学習意欲に関するアンケートを行ったところ、約78%の肯定的な回答が得られた。これらのことから、中学校理科の授業内において、五感を重視した直接体験が理科に対する興味・関心や学習意欲を向上させることが示された。

長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻
平成28年度教育研究成果報告書

平成29年3月20日発行
編集・発行者　長崎大学大学院教育学研究科
〒852-8521 長崎市文教町1－14
電話(095) 819-2263
印刷・製本　H.P.第一